
俺は世界を呪う、世界は俺を呪っている

夏のサンタクロース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は世界を呪う、世界は俺を呪っている

【Nコード】

N1800D

【作者名】

夏のサンタクロース

【あらすじ】

青年は夢を見る。他の誰もが見得ない強烈な夢を。

青年はすでに絶望していた。

『誰も言っていないよ』

—信じられないっ！！—

『誰も言っていないよ』

—嘘をつくなっつ！！！—

『誰も言っていないよ』

— お前も、お前も、お前さえも……敵なのか……。 —

青年は完全に一人だった。四面楚歌とは、こういうことなのか、と思ひ知つた。俺が、何をしたつていうんだ。何もしてないっ！！！安心できるのは自分の家だけ、そこでさえも布団に入り、ブルブルふるえていた時があつた。

これは少年が、とある高校に入り、二年生になったばかりの時の話。

高校が終わり、電車に乗り、帰宅するはずだった、あの日。あの日は、全てを、俺の全てを変えた。

高校の帰り、青年は電車に乗っていた。いつもどおり、電車の中では、ワイワイ、ガヤガヤ、といろんな声が聞こえる。

「たつ君の彼女の写真、みせてもらっただけど、コレ、笑えるよね。」

「あはは、マジ、これはないって。」

あゝ、腹いて

『もうすぐ、ベリー・ボッパの映画が上映されるんだけど、見に
いかな?』

あの子かわいい。

全て、他愛のない話にみえた。

しかし、最後に聞こえた声の意味とおんなじ意味の言葉が、繰り返される。

『ほんとだ、かわいい』

『かわいい』

『キヤー』

アイドルでもいるのか？と思ったが、それらしき人物はいない。どころか、こっちを向いてる人がいる。

ま、さ、か？そんな妄想を打ち消そうと努力しながら、顔は真っ赤になる。

そして、降りる駅に着いた。気分は悪くなかった。…そのときは。

毎日ではなかったが、そんなことが続いて、2カ月後。あるまじきことが起きた。クラス内でもかわいい、という事を聞くようになった。

最初はアイドル（又は他校の生徒）の写真でもケータイでみているのだろう、と思った。

ところが、それは違う、という事に気づかされるのはさらに一カ月後になる。

その時になると、もう、意味が、分からなかった。授業ごとの休み時間になると、他のクラスの女子がドアを1センチぐらい開けて、このクラスを覗いている。

そして、覗いたと思うと、キヤー。と言って、走り去って行く。

最初は変人か？と思ったが、次の日もその次の日もそしてそれ以降も（たまにだが）一ヶ月間ぐらいあった。

しかも、声からしておんなじ人ではないらしい。だが、全て女子の声で、みんな、こう言っていた。

「似ている」

と。

誰が何に似ているのかは全くわからなかったが、これは一つの恐怖だった。だが、だれもこのことを話題にする奴はいない。

「似ている」

この言葉を思い出した時、俺の背筋に悪寒が走った。

そして季節は夏。このころになると電車の中でいろんなおかしな声がこだまするように流れる。そして、それらが全て自分に向けられているように感じた。

『かわいい』

これは以前と変わってない。

『くさい』

くさい？確かに汗臭い時もあるが…。電車中にまで拡がるだろうか？そんな事はない、と思いつつ、医者に行き、漢方薬をもらったがいまだ、声は変わらない。

『ニヤけてる』『キモい』

これはニヤけてて、キモい。という意味ではないか？と判断した。確かに思い当たる節はあった。最近、かわいいという声をきくと唇の筋肉が横にひきつる。妄想してるからか、と考えて、それらを考えないようにする…が、やはり、暗示のように”あの声”をきくとひきつる。

これはそれ以降も努力したが、所詮、無駄だった。

そして、最後に…、

『死ねっ』

これは男子からの声だった。臭いからなのか？まあ、一応、それで理由は分かるが…。この”死ねっ”は1番堪えた。何度死のうと思っただか、分からない。とにかく、悪意のある声で低く、響きのある声で、死ねっの合唱が始まった。

後で、死ねっ、の前に”しんしょう”がつくことになる。そして、女子の声も加わるようになる。

そして、これらの言葉はやはり、”かわいい”のように1、2カ月後に学校にまで伝染した。

また、ある日、電車の中でいつもどおり罵倒を受けていた時、

『―君はしんしょうじゃないよ。』

という声が聞こえた。

この声には聞き覚えがあつた。

中学時代の…。

胸が痛く、痛くなった。これがいじめだとして、そのいじめを止めようとする奴が一人いれば、その一人がその後、どうなるかなんて容易に想像できる。

俺の為に…。

そんなこと、我慢できなかった。むしろ、その人も俺を罵倒して欲しかった。

我慢できず、しかし何もできない自分が恨めしかった。結局、我慢するしかなかった。

青年は…絶望した。そして泣いた。とにかく、泣きまくった。

―俺が、何をしたっ！何をしたっというんだっ！――

悲痛の、声にでない声だった。

やがて、少年は近くの店でもそれらの声を聞くことになる。

青年は…青年は誰も信じたくなかった。下ばかりをむいて、前を見るのが、人間を見るのが、恐くなった。

それでも、と友達達に聞いて見る。これまで聞こえてきた事について。勇気を持つて。

次にでた心の声は前とおんなじだったが、怨みの声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1800d/>

俺は世界を呪う、世界は俺を呪っている

2010年12月13日09時30分発行